

炎症性乳がんの診断と治療

炎症性乳がんは乳がんの中でも比較的稀な病型で、頻度は浸潤性乳がんの 0.5 ~ 5 %といわれており、その予後はきわめて不良です。

乳房に疼痛・圧痛を伴う熱感ある硬結を認め、皮膚に広範な発赤、浮腫が出現し、peau d'orange と呼ばれる外見を示し急速に増大します。その臨床的特徴より炎症性乳がんとなづけられました。

病理組織学的には腫瘍周囲の真皮内へのリンパ管侵襲が著明で、リンパ管内腫瘍塞栓によりリンパ液のうっ滞、毛細血管の拡張、充血、浮腫をきたすと考えられており、炎症細胞浸潤による炎症所見は関与していません。

診断：

乳房皮膚のびまん性発赤、浮腫、硬結などの臨床所見より診断されますが、乳房の炎症性疾患との鑑別が困難であるため、皮膚を含んだ core needle biopsy などの組織学的診断が必要となります。

治療：

Her2 陽性乳がんであれば、トラスツズマブなどの抗 Her2 療法を中心とした薬物療法、Her2 陰性乳がんであれば、併用化学療法による薬物療法が第一選択となります。治療効果をみながら、手術、放射線療法などの局所治療も考慮します。いずれにしても、強力な集学的治療法を必要とする場合が多くなります。薬物療法の進歩により治療成績は徐々に改善してきています。